

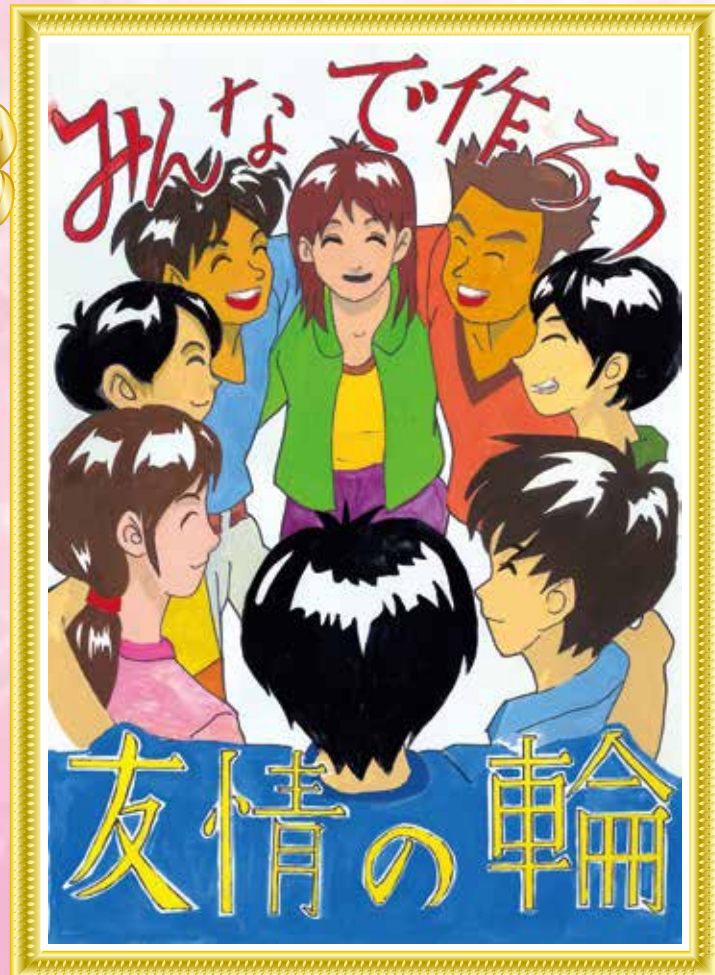
令和5年度

人権啓発作文・ポスター優秀作品集

# おもいやり



笠田小学校2年  
西谷 萌々那  
(にしたに ももな)



笠田中学校1年  
岡本 真宙  
(おかもと まひろ)



## 発刊にあたって (はじめに)

かつらぎ町では、毎年、人権啓発推進事業の一環として、広く町民の皆様に対し、人権問題に対する理解と認識を高めていただきたく、人権啓発作文とポスターを募集しております。

令和5年度は、人権啓発作文350点、人権啓発ポスター52点の応募があり、どの作品も素晴らしい感性によって表現され、人権意識の高揚が感じられました。

その作品の中から、優秀作品として選ばれた作文13点・ポスター11点を人権啓発教材「おもいやり」と題して発行することとなりました。

この作品集の作文は、作者の思いを大切にしたいと考え、誤字訂正のほかは原文のまま掲載しております。この教材が一人でも多くの方々に活用され、一人一人の人権意識が益々高まることを願うものです。

かつらぎ町  
かつらぎ町教育委員会

## 人権啓発ポスター優秀作品

敬称略

<b>最優秀賞</b>	笠田小学校2年 西谷 萌々那	『大切なちいさな命』……………表紙
	笠田中学校1年 岡本 真宙	『みんなで作ろう友情の輪』……………表紙
<b>優秀賞</b>	大谷小学校3年 森 實 佳 奈	『みんなのちがいがすてきだね』……………2
	大谷小学校3年 西林 七 海	『一人じゃないよぼくがいる』……………2
	梁瀬小学校3年 上田 茉 穂	『えがおいっぱい 花いっぱい』……………2
	笠田小学校6年 井尾 葵	『十人十色みんな違ってみんないい』…2
	笠田小学校6年 山田 柚 奈	『一生の傷』……………2
	笠田中学校1年 江口 由 菜	『平和はみんなの輪から』……………3
	笠田中学校1年 岸岡 由 依	『見てるだけじゃ救えない』……………3
	笠田中学校1年 木下 杏 萌	『分かって!! 私は特別な人間ではない』…3
	笠田中学校1年 林 花 慧	『平和に暮らそう』……………3

## 人権啓発作文優秀作品

敬称略

<b>最優秀賞</b>	大谷小学校6年 森 實 奈 生	『それぞれ違う「あたりまえ」』……………4
	妙寺中学校1年 西浦 峻 太	『頑張り屋の弟』……………6
	笠田高等学校3年 匿名希望	『戦争について私たちができること』…8
<b>優秀賞</b>	笠田小学校4年 白原 楓 果	『何気ないひと言』……………10
	笠田小学校4年 齋藤 涼 太	『ぼくにできること』……………11
	笠田小学校4年 岡部 紗 来	『いじめについて』……………12
	笠田小学校4年 阪中 初 菜	『みんながずっと笑顔でいるために』…13
	大谷小学校6年 石橋 奏 多	『言葉の力』……………14
	妙寺中学校1年 森本 竜 生	『おやすみ、また明日』……………15
	妙寺中学校1年 森本 凌 生	『繋がり』……………16
	妙寺中学校2年 森 實 穂乃佳	『世界平和を願って』……………18
	笠田中学校2年 細原 来 美	『認め合える社会へ』……………20
	笠田高等学校3年 上垣内 歩 美	『障害者を支えよう』……………21



小学生の部



大谷小学校3年  
森實 佳奈 (もりざね かな)



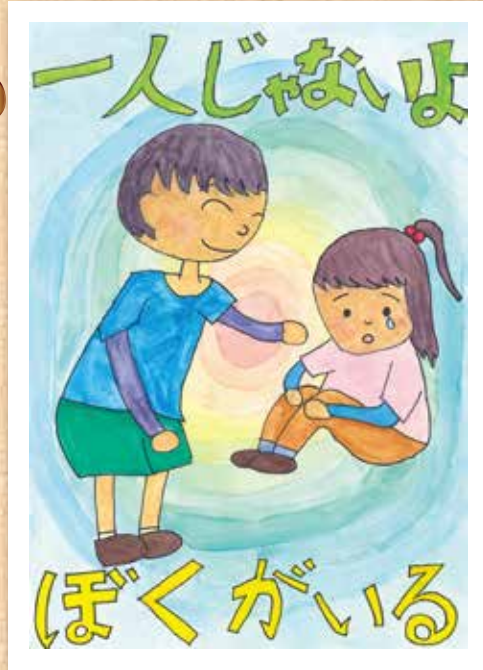
梁瀬小学校3年  
上田 茉穂 (うえだ まほ)



笠田小学校6年  
山田 柚奈 (やまだ ゆずな)



大谷小学校3年  
西林 七海 (にしばやし ななみ)



渋田小学校6年  
井尾 葵 (いお あおい)



中学生の部



笠田中学校1年  
江口 由菜 (えぐち ゆな)



笠田中学校1年  
木下 杏萌 (きのした きほ)



笠田中学校1年  
岸岡 由依 (きしおか ゆい)



笠田中学校1年  
林 花慧 (はやし かえ)







## それぞれ違う「あたりまえ」

大谷小学校6年

もり ざね な お  
森 實 奈 生

「あたりまえのことをあたりまえだと思えることは、本当に幸せなこと。」と、ある日父が私に言った。私の父は、感音性難聴で、両耳に補聴器を付けている。補聴器を付けていない時は、会話ができない。付けていても、言葉が聞こえていない時がある。

「お父さんは幸せじゃないの。」と聞くと、

「幸せだけど、生活していて、困難なことや不便なことが多い。」と父は言う。

あたりまえってなんだろう。疑問に思い、あたりまえという言葉を探ると、『普通のこと・そうあるべきこと』と書いてあった。

私は、一人でいるときや、家族でいるときは、『普通・そうあるべき』つまり『あたりまえ』を意識せず過ごしている。一方、学校など、集団の中でのときは、知らず知らずのうちに『あたりまえ』を意識している。それを基準に、劣っているとか、まさっているとか、変わり者になっていないかなどと、考えることがある。「あたりまえではない」というのは、まわりに溶け込めないイメージがあって、無意識にそうならないように、と避けていた。

夏休みに、私は、水泳教室で、中村智太郎さんに水泳を指導してもらった。中村さんは、五大会連続でパラリンピックに出場し、ロンドン・パラリンピック競泳男子 100m平泳ぎで、銀メダルを獲得した。中村さんには、生まれつき両手がない。両親が、「おぼれることがないように」と幼少期にプールに連れて行ったことがきっかけで、水泳を始めたそうだ。中村さんと会ったとき、最初は中村さんの両手がないところに、違和感を覚えた。けれども、話を聞いたり、泳ぎを見せてもらったりするうちに、印象が変わった。ゴー

グルを足でつけている姿を見せてもらったり、運転や携帯の操作も自分でするという話を聞き、足を手のようにして生活ができることに驚いた。水泳をしている姿は、速いのはもちろん、楽しそうで、輝いていた。もし、私が両手を使わずに今日一日生活することになったら、一人では何もできないだろう。中村さんは、きっと幼少期から手を使わない生活をしていく中で、足をうまく使うことを、工夫したり努力したりして身につけていったのかもしれないと思った。中村さんにとっては、両手がないことや、両手を使わずに泳いだり、運転したりする生活はあたりまえなんだと知った。はじめ、違和感を感じたのは、自分のあたりまえを基準にしていたからだと思った。無意識に、私は自分のあたりまえを押し付けていた。

私は、自分のあたりまえを否定されるといやな気分になる。だから、相手にも自分のあたりまえを押し付けるのは違うと思う。あたりまえというのは、他人によって決められるものではなく、今まで生きてきた経験から一人一人が作っていくものだと思う。生まれた時からみんな違うのだから、あたりまえも、みんなそれぞれ違うものなのだ。男性だから、女性だから、大人だから、子どもだから、高齢だから、若いから、障害があるから、障害がないから、白人だから、有色人種だからなど、ひとくくりに決めつけるのも、おかしいと思う。だけど、今は、多数派の人たちのあたりまえを基準に、生きやすい世の中になっていると感じる。それにあてはまらないとき、父のように、困難や不便に感じることもある。

皆が心地よく暮らすにはどうすればいいのだろうか。自分や多数派のあたりまえを押し付けるのではなく、まずは、相手のあたりまえが何なのかを知って、相手の立場に立って考えてみることで、そして、お互いの違いを認めたり、話し合っていくことが、大切な第一歩だと思う。私は、一人一人「あたりまえ」が違うことがあたりまえなんだと、胸を張って言える人になりたい。







## 頑張り屋の弟

妙寺中学校 1年

にし うら りょう た  
西 浦 峻 太

私には一つ年下の弟がいます。弟には私たちが当たり前に出ることが、スムーズに出来ないことが多々あります。例えば、はさみ。はさみを使う時は片方の手ではさみを動かし、もう片方の手で紙を持って動かします。私達はそれを深く考えずにすることが出来ますが、弟にとってはその動作がとても難しいことなのです。なぜなら、弟は複数の動きを同時にすることが苦手だからです。図工の時間は、先生や友達に助けをもらいながら作業をしているそうです。縄跳びやリコーダーもそうです。縄跳びは縄を回しながら跳びます。リコーダーは息を吹き込みながら指を動かします。弟が難しいと感じる動作や作業は日常生活にもたくさんありますが、失敗も繰り返しながら、弟なりに出来るようになってきています。

弟には他にも、耳から聞くだけでは理解しにくかったり、イメージするのが難しかったりするところがあるため、視覚で分かる工夫をする必要があります。このことで、忘れられない出来事があります。弟が4年生の時、公衆電話の使い方を一緒に練習しました。言葉で手順を言うだけでは理解することが難しかったので、私と母で使い方を書いたカードを作りました。そのカードには、使い方の手順に番号つけ、絵も加えました。そして、そのカードを使って、学校の公衆電話から家に電話をかける練習をしました。受話器をとり、お金を入れて、番号を押すところまでは順調にできた弟でしたが、その後、受話器を見ながら、受話器に向かって喋り始めたのです。私は正直「え？何やってんの？」と驚きました。なぜそうなったのかを考えてみると、私たちが作ったカードに「受話器を耳に当てる」という手順を書いていなかった

からでした。私も母も「受話器を耳に当てることぐらい分かるだろう。」と思い、私達の当たり前前の感覚でその手順を飛ばしていたのです。この出来事で、私たちの当たり前前が弟にとっては当たり前前ではないという事を強く実感しました。

弟は、私たちが当たり前前に行っていることを何倍もの力を使って行っています。母に「オレ、すごく難しいことを頑張ってるのよ。」と言っていたことがあるそうです。私は、その弟の言葉を聞いて、自分の苦手なことをしっかり分かって、それに向き合っている事がすごいと感じました。

弟は、頑張ってもうまくできない事が多いです。できなくて、イライラしてしまうこともあります。でも、できない自分をネガティブに考える事はなく、とても前向きです。それは、周りの人が頑張っていることを理解してくれているからだと思います。弟の周りには応援してくれる人や、助けてくれる人、寄り添ってくれる人がたくさんいます。その人たちのおかげで、前向きに考えることができるのだと思います。もし「なんでできないの？」と弟の努力を否定する人がいたら「どうせやってもオレにはできないし…」とネガティブに考えてしまう弟になっていたかもしれません。だから、頑張りを理解してくれる環境は弟にとってすごく大事だと思います。その環境を作ってくれている人たちには、本当に感謝しています。

私も弟のしんどさに一緒に向き合って、頑張りをお支えし続けていきたいと思っています。大きな壁はいくつもあるかもしれませんが。そんな時も、一緒に乗り越えていけるように、どこにどんなしんどさや難しさがあるか理解して、精一杯寄り添っていきたいです。

私の弟だけでなく、見た目には分からないしんどさを持っている人たちはたくさんいます。私達の当たり前前が、当たり前前じゃない人たちもたくさんいるのです。でも、その人たちはしんどさと向き合いながら、その人たちにすごく頑張っていると思います。だから、そのしんどさや頑張りをお支えして寄り添うことで、少しでも力になれると思います。そんな環境を作ることが、しんどさを持っている人たちが前向きになれる第一歩になると、私は信じています。





## 戦争について 私たちができること

笠田高等学校3年 匿名希望

昨年、修学旅行で広島県に行きました。原爆ドームについての説明をしていただいたのが今でも印象に残っています。罪のないたくさんの方が戦争に巻き込まれ命を落としました。なぜ罪のない人々が命を落とさなければならなかったのか、そう思ったことをはっきりと覚えています。

現在、原爆ドームは平和を訴える記念碑として、負の世界遺産と呼ばれており、ユネスコの世界文化遺産に登録されています。戦後当時は、被爆という悲惨な思い出につながることから、取り壊しを望む声もあったそうです。しかし、被爆したことで亡くなった女性の日記により、保存される方向へ進んだそうです。その女性の日記には、「原爆ドームがおそろべき原爆のことを後世にうたえかけてくれるだろう。」とあったそうです。原爆ドームが保存されているおかげで、日記通りに現代に生きる私たちが原爆のおそろしさを学ぶことができます。

しかし、世界では現在も内戦や紛争が起きている国が多く存在します。ウクライナ侵攻などがよくニュースに流れているものだと思います。その内戦や紛争に巻き込まれ、苦しんでいる人もたくさんいます。その中には子どもも含まれ、栄養失調などで命を落とす人も少なくありません。命を落とさなくても、住むところがなくなったり、教育を受けられなかったり、兵士として戦う子どもも多くいるそうです。

これらのことを調べてみて、罪のない多くの方が亡くなっている、そして、今も命を落としている人がいることを知りました。私たちが今、苦しんでいる人たちに対してできることは多くないでしょう。お金や物を寄付することが直接的な支援方法だと思います。しかし、それがしたくてもできないなど難しい人もいます。一番簡単な支援方法は、内戦や紛争についてを知ることです。平和や戦争について知ることによってこれ以上戦争が起きることのないようにすることが大切だと思いました。







## 何気ないひと言

笠田小学校4年 しら 白 はら 原 ふう 楓 か 果

わたしは、メガネをかけています。4年生になる少し前から黒板の字が見えにくくなったので、メガネを作りました。わたしの家族は、お父さんも、お兄ちゃんも、メガネをかけています。

わたしがメガネをかけはじめたところ、家族みんなで出かけたとき、知らない女の子たちから、「見て、みんなメガネかけてる。」と笑いながら言われたことがあります。その声が聞こえてきたとき、とても悲しい気持ちになりました。

わたしは、お母さんに、こんなこと言われたよ、と話しました。お母さんは、「それはいやだったよね。でも、そんなこと気にしないでいいよ。楓果のメガネ、とっても似合っているよ。お父さんも、お兄ちゃんも、メガネ似合っているでしょ。」と言いました。お兄ちゃんはメガネを三つ持っています。お父さんはもっとたくさん持っていて、着る服に合わせてメガネを選んでいきます。

わたしはメガネをかけている自分がいやだなとか、変だなと思ったことはありません。メガネを作りに行ったときも、たくさんの種類があって何が似合うかなといくつも試しながら決めて楽しかったです。

お母さんは、「あの女の子たちは何気なく言ってしまったんだろうね。でも、それで相手がきずつくことがあるんだということを知っておかないといけないね。」と言いました。

わたしも今までに、何気ないひと言で友達やだれかを気づかないうちにきずつけていたことがたくさんあったのかもしれないな、と思いました。

だれかをきずつける言葉や、かなしい気持ちにさせる言葉より、やさしい気持ちになる言葉や楽しくなる言葉、うれしくなるような言葉がたくさん聞こえてくるほうが、ずっといいと思います。わたしも言葉に出すまえに、こんなことを言ったら相手はどう思うかな、と考えてから言えるようになりたいです。そして、だれかを元気づけたり、いっしょに楽しく笑ったり、やさしい気持ちになれるような言葉を言いたいです。



## ぼくにできること

笠田小学校4年 さい 齋 とう 藤 りょう 涼 た 太

ぼくは、二年前にテレビで見た東京パラリンピックを思い出している。水泳、アルペンスキー、車いすテニス、サッカーなどである。「すごい、すごい。」と声が出るほど感動した。では、この選手たちはふだんどんな生活をしているのだろうか。

世の中には障がいを持った人が大勢いる。生まれつきの人もいれば、病気や事故で突然障がい者になった人もいる。自分が一生健常者でいられるかどうかはわからない。だからもし、自分が車いすで生活しなければならなくなったらと考えた。最初はショックで何も考えられなくなるほど落ち込むかもしれない。立ち直れないかもしれない。けれど選手たちはあきらめずアスリートになり、もちろん大変だけど、それでもパラリンピックなどに出場して、前向きに生きるのはすごいなと思った。

ぼくは、地いきのサッカークラブに入っている。ドリブルやヘディングやシュート、グラウンドいっぱい走り回っている。練習に行く時は、自転車にも乗る。こんなことは、当たり前なので何も考えないで、ときどき文句を言いながらやっている。もしぼくが障がい者になったら、当たり前だと思っていたことが、当たり前でできなくなるのだと思った。たくさんの人の手をかりて生活しなければならなくなるのだ。

ぼくは、健康だからいろんなことができる。お年よりの人が、スーパーマーケットで売り場が分からなくてこまっているときには、案内してあげたい。車イスの人がでこぼこした道で動きにくくてこまっていたら、手助けしたい。まだ会ったことはないけど、目の見えない人や耳の聞こえない人、健常者同士でも、いろんな困り事があったりする。勇気を出して、困っている人の何か役に立つことをしたいと思う。まずは、だれにでも、親切にしていきたい。





## いじめについて

おか べ さ ら  
渋田小学校4年 岡 部 紗 来

わたしは、いじめについて考えました。

いじめをすると、相手の心には、一生きずがのこります。あるいは、たえきれなくて、自さつをしてしまう人も、いっぱいいます。

わたしは、友達に「バカじゃないの。」と言われて、きずつきました。でも、言った本人は、そのつもりではないように見えました。わたしも、そのように、相手がきずつかないような言葉を、これからは、気をつけて言いたいと思いました。

たとえば、わたしの友達がいやなことをされていたら、している子に、「やめてあげなよ。」と、言えるかふあんです。次に、わたしがいやなことを言われたり、されたりするかもしれないからです。でも、わたしは、勇気を持って、言えるようになりたいです。

このように、ちょっとしたことで、いじめになっていくたねになります。いじめは、小さいことから、大きなことになって、いじめになります。

わたしは、いじめについて調べていたら、気になる記事がありました。それは、2022年～2023年にかけて、いじめによって、自ら命を絶った小中高生が、過去最多となったことを知って、わたしはおどろきました。こんなにも、いじめで自ら命を絶っているなんて、悲しいことだし、相談できる人が、いなかったのだろうなと思いました。わたしがその立場になったら、いやになって、自さつをしたい気持ちになるかもしれません。でも、わたしは、そんなことはしません。なぜなら、母親が、一生けん命がんばって産んでくれたからです。わたしは、いじめをされていませんが、されている人の気持ちは分かります。いじめをされている立場の人の気持ちを想ぞうすれば、かんたんに分かります。いじめをしている方は、いじめているのを、わらいながら、グループになって、楽しんでいます。本当に、いじめていることは、楽しいのでしょうか。一度いじめたら、どんどん楽しくなってきた、止まらなくなるのでしょうか。わたしにはそんな気持ちは、理かできません。

いじめをなくすためには、みんなが思いやりを持って、人に接することだと思います。自分のことばかり考えずに、相手のことも考えて、言動、行動することで、人と人同士の関係がよくなり、いじめもへっていくのではないかと思います。



## みんながずっと笑顔でいるために

さか なか は な  
渋田小学校4年 阪 中 初 菜

私は最初、人けんというものを知りませんでした。インターネットで調べてみると「だれもが生まれながらにもっている人間として幸せに生きていくためのけんり」とかいていました。でも私は一つだけ質問がうかびました。それは人けん問題に「かんきょう問題」がなぜあるんだろうということです。そこで私はお母さんにどうして人けん問題に「かんきょう問題」があるのかなと聞いてみました。お母さんはこの前うちの近くでもそんなことあったやろと話してくれました。

それは、今年の6月に和歌山県で大雨がふったことです。その日の雨はいつもの雨とはちがい、はげしく、バケツをひっくり返したような雨でした。その大雨で川がぞう水して、家の前がどろだらけになってしまいました。そのおうちの人、近所の人、お母さんとお父さん、遠くから来てくれた人が集まってごみやどろを出したりと、暑い中、何日も何日も、たくさんの方が作業をして大変そうでした。でも私が一番大変そうに思ったのはその家のおじいさんが、その家から引っこすことになったことです。お母さんは住むにはトイレやお風呂をなおさないといけなから大変なんやでと言っていました。この大雨は地球温だん化のえいきょうでいじょう気しょうになってきていて、線じょうこう水たいができたからかなとお母さんは言っていました。でもこの雨が何で人けん問題につながるんやろうと思ったのでお母さんに聞きました。温だん化が原いで大雨で畑や家がしずんだり流されたりする、すると食べ物や住む所がへっていく、今考えていたのは日本の話だけど世界でもこんなことがふえてきている、そうすると住むところがへって、食べ物がうまくつくれなくなってくる、昔から住む所や食べ物、エネルギーのあるところをめぐる人間は戦争をしてきた、これからまたそうならないか心配よねって話でした。そうしたらみんなこまりかなしい人がふえます。これは幸せじゃないし幸せがうばわれます。これが「かんきょう問題が人けん問題につながるということなんだな」と思いました。そんなに温だん化が問題ならかい決できないのか考えました。わたしはこんな未来はいやです。でももう世界で起き始めてしまっています。でも今ならまだ地球をすくえるかもしれません。なぜかという世界みんなが協力したら少しでも未来は変わるかもしれないからです。だから小さい事でも少しずつやりたいです。私もまたきゅう食をのこさないとか電気を消すや物を大事にするなど少しずつ二さん化たんそをへらす活動をしていきたいです。それで世界のみんなが笑顔で、すてきな未来でいてほしいです。





## 言葉の力

大谷小学校6年 いし石 ばし橋 かな奏 た多

この世の中には、「良い言葉」、「悪い言葉」があります。例えば、「ありがとう」「ごめんね」などは良い言葉、「あっち行け」「だまれ」などは悪い言葉だと言えます。良い言葉は、みんなが気持ち良く笑顔になるけれど、悪い言葉は、聞いている子も気が悪くなるし、言われた子は悲しくて泣いてしまうこともあるでしょう。

ぼくが経験した事で言うと、友達の消しゴムが落ちたときに拾ってあげると「ありがとう」とお礼を言ってくれました。たった一つのありがとうでもうれしかったです。

ぼくは、2年生の頃フワフワ言葉とチクチク言葉について勉強したことがあります。しかし今でもつい、チクチク言葉を言ってしまうことがあります。そこで、どうすればよいかを6年生になった今、もう一度考えてみました。

コミュニケーションをうまくとるための方法の一つに、『リフレーミング』という考え方があるとお母さんに教えてもらいました。それは何かというと、物事のとらえ方を変えて、別のとらえ方をしてみるのだそうです。例えば、インターネットで調べると、コップに水が半分入っている状態を見て、「半分しか入っていない」と思うか、「まだ半分も入っている」と思うかで全く気持ちがちがうという例が書かれていました。ぼくのことですと、算数の問題で答えをまちがえた時に、「苦手だからできない」と思うか、「いい挑戦をした」と思うかで感じ方が変わります。サッカーでは、パスを失敗したときに、「やってしまった」と思うか、「次はいいパスを出そう」と思うかで感じ方が変わってきます。要するに、言葉の表現の仕方によって、自分の気持ちも相手を感じる気持ちも大きく変わるということを知りました。

つい、チクチク言葉になってしまいがちなぼくが意識していくことは、相手に気持ちを伝えるときに、「ぼくは、〇〇だと思うよ」とぼくを主語にした言葉に言い換えたり、リフレーミングの考え方でできるだけポジティブな言葉を使うことだと思っています。ポジティブな言葉であふれる毎日を過ごしていくことでみんなが幸せになり、仲間のことも自分のことも大切にしていけるとぼくは思います。



## おやすみ、また明日

妙寺中学校1年 もり森 もと本 りゅう竜生

「おやすみ、また明日。」毎日私の家では、この言葉で一日が終わります。物心ついた頃から言っていた言葉でしたが、「また明日。」の5文字に込められた思いを知り、今を生きていることの大切さを知りました。

私には祖父の記憶がありません。もちろん顔も祖父の家に置かれている、優しい笑顔の写真でしかわかりません。祖父は、私が3歳の時、交通事故で亡くなりました。母は、祖母からの電話で事故にあったことを知り、病院に駆けつけたそうです。母も祖母も、かすり傷だけで念のために病院に運ばれたのだらうと思っただけですが、病院に着いてもなかなか祖父に会わせてもらえず、不安な気持ちが大きくなっていったそうです。そしてやっと呼ばれて医師からの説明で「厳しい状態だ」と伝えられ、頭が真っ白になったそうです。しかし、祖父を支えなくてはと必死に冷静になろうと思ったそうです。そして祖父は、大切な家族に見守られながら最期のその時まで、必死に生きようと頑張ったそうです。

でも最後にたった一言、小さな声で「もうがんばれやん。」という言葉を残し、涙を流して最期の瞬間を迎えたそうです。その話を聞き、まだまだ生きたいとどんなに願っただらうと想像すると胸が張り裂けそうになりました。

祖父の記憶がない分、母からたくさん祖父のことを聞きます。「とても正義感が強くて、困っている人がいると、見て見ぬふりが出来なくて必ず手を差しのべるおじいちゃんだったよ。」と話す母の顔は、少し寂しそうです。そして亡くなる数日前に祖父から、かかってきた電話にでた時、「今、忙しいから切るね。」とすぐに切ってしまったことを後悔しているそうです。何年も経った今でも、「元気か？」と家に訪ねてくるような気がすると話しています。この経験から母は、家族に「後悔が残るような一日を過ごすのではなく、一日一日を大切に過ごさなさい。」とよく言います。だから私の家族は、後悔のないように何に対しても、一生懸命しようと毎日過ごしています。祖父は、まだまだ色んなことをしたかったと思います。祖母と行こうと約束していた海外旅行のために、世界地図を買い、うれしそうに見ていたと聞くと胸が苦しくなりました。

私たち家族は、明日は当たり前やってくる日々を過ごしていました。そして、突然の悲しい出来事は、家族の穏やかな日々を一瞬で、真っ暗な闇に突き落としました。そして母は、日に日に元気がなくなっていったと姉から聞きました。だから姉は「絶対に明日はくるよ。心配しないで。明日も一緒に過ごそう。」という意味を込めて「おやすみ、また明日。」と言い始めたそうです。

私は、今を生きていることが、どんなに大切な一瞬一瞬であるかを心にしっかりと持ち、努力を怠ることなく「今」を大切にしていきたいと思っています。そして、一日の最後には、たった5文字だけれど、たくさんの思いやりを込めて「おやすみ、また明日。」と言い続けようと思っています。人と人とのつながりの中で大切な相手を思いやる「言葉」。そんな「言葉」を、たくさん言える人に私はなりたいです。





## 繋がり

妙寺中学校 1年 <sup>もり</sup>森 <sup>もと</sup>本 <sup>りょう</sup>凌 生

「絵本の読み聞かせ」と聞いて何を思いうかべますか？多くの人は、聞く側の立場で、どんな絵本を読んでもくれるのかな、何冊読んでもくれるのかなと心が弾むと思います。私もその多くの中の一人です。でも今年の夏、聞く側ではなく、読む側で「絵本の読みきかせ体験」に、ボランティアとして参加し、「繋がり」の大切さを学びました。

一日目は、絵本について色々教わりました。絵本は、言葉の湧きでてくる世界で、生きる喜びを感じさせ、生きる力を与えます。そして同時に大人をも、生きかえらせてくれる言葉の泉と知りました。そして、すぐれた絵本には、人間が人間であるために、いちばん大事な情緒と想像力と知恵が、いちばん単純な、いちばんわかりやすい、いちばん使いやすい形でこめられていると知り、今までたくさんの絵本を読み聞かせしてもらっていた日々を思いだして、感謝の気持ちでいっぱいになりました。そして最後に、こども園で実際に読む絵本を選びました。私は自分が5歳だったら、どんな絵本を読んでもらったら、心に残るだろうと当時の気持ちになり、すごく考えました。そして「みんな笑顔になってほしい」と願い、一冊の絵本を選び帰宅しました。

次の日は自宅で、読み方、「間」の取り方などを練習しました。どんなふうに読めば、聞きやすく、そして心にいつまでも残る一冊になるだろうかと何回も読み「絵本の読みきかせ」の当日をむかえました。

当日、集合場所に集まると手作りのエプロンを配ってくれました。そして名札も用意されていて、名前のまわりは、折り紙で囲まれていました。アサガオや鶴など色鮮やかに作られたこの名札は、かつらぎ町の高齢者の方が今日のために作ってくれたものだと言われ、私は、その人の思いも込めて読み聞かせをしようと心に強く思い、こども園に出発しました。

こども園に着いて準備をして待っていると、5歳の園児が笑顔できてくれて、

緊張していたのが一気にほぐれました。そして、いよいよ自分の順番になり、園児の前に本を持って座って、みんなの顔を見ると、どんな絵本なんだろうと興味津々で私の持っている本を見てくれていました。私は「ゆっくり、ゆっくり」と心で思いながら、絵本を読み始めると、読むたびに笑いと、驚きの反応をしてくれ、とても嬉しく、読み終わった時は、自分も笑顔になっていました。

「みんな笑顔になってほしい」と願い、私が絵本を選び、そして地域の高齢者の方の優しい心遣いと、「絵本の読みきかせ会」に携わる人達の色んな思いが「繋がり」小さな笑顔の花がたくさん咲きました。一人一人出来ることは、小さな力かもしれませんが、でも繋がることで小さな力は、大きな力となり笑顔の花を、もっとたくさん咲かせることができると思います。そしてその笑顔の花が、ずっと咲き続ける未来であってほしいと願います。

私がこの夏、経験した「繋がり」の大切さを、一人でも多くの人に伝えていきたいと思います。そうすることで、一人一人が相手を思いやり、行動し、すべての人がいつも笑顔で、幸せな気持ちで過ごせると信じたいです。私の小さな力が、みんなの思いやりの心の「繋がり」の第一歩になりますように。







## 世界平和を願って

妙寺中学校 2年 もり 森 ざね 實 ほのか 穂乃佳

今年の春、曾祖母が天国に旅立った。優しくて穏やかで、笑顔がかわいい人だった。曾祖母は、10代の頃に太平洋戦争を経験していた。そして、幼い妹を栄養失調で亡くしていたことを、母から聞いた。曾祖母は、生前、戦争のことや妹のことについて、あまり話そうとしなかったそうだ。

「思い出して語るのが、辛かったからかもしれないね。」

と、母が言った。戦争で大切な人を失った悲しみは、戦争が終わって月日が流れてもずっと残り続けるのだと、改めて感じた。

戦争という言葉を知り、今、私がすぐに思い浮かべるのは、ウクライナとロシアの戦争だ。戦争が始まった頃は、毎日のように、ウクライナの戦地の様子を報じているニュースを見た。ミサイルが街に次々と落とされている映像を見て、地球上で現実に起こっていることだとは思えなかった。私たちと同じように、学校や職場に行ったり、家族と過ごしたりしていたウクライナの人々の生活が、突如始まった戦争によって、一変した。家族と会えなくなり、毎日怯えて暮らさないとはいけなくなってしまった。日本で住む私には、考えられないことばかりだった。

今年の夏休み、ウクライナとロシアの戦争を調べていく中で、動員令の発令によって、戦いの最前線に投入されることになった、一人のロシア軍人の日記が目にとまった。書いたのは、2歳の子供を持つ、ビタリー・タクタシヨフさんだ。彼の日記の中で、去年の11月30日に書かれていた内容が、特に印象的だった。彼は、自分がすぐに戦闘へ投入されるという話を聞き、こう書き残していた。「怖い。涙を流しながらこれを書く。家に帰りたい。家族みんなを愛している。私は誰も殺したくない。すべての宗教が『人を殺してはいけない』と教える。我々も人を殺さず、ウクライナ軍も我々を殺さないことを望む。」この日記は1月5日を最後に終わっていた。絶望や不安の中で、家族の元に戻ることを願っていたタクタシヨフさんだったが、今年7月に遺体となって発見されたそうだ。彼は、死ぬまで戦うことを望んでいなかった。戦争が彼

の自由や権利を、すべて奪い取ってしまった。

初めは、あんなに衝撃を受けていたウクライナとロシアの戦争の報道に対して私は、次第に慣れ始めてしまっていた。けれども、この日記を読んでまだ戦争は続いているのだと、はっとした。今、この瞬間も、苦しんでいる人たちがいることを忘れてはいけないのだ。そして、戦争中だけでなく、この戦争が終わった後も、曾祖母のように、たくさんの人々が悲しくむなしい思いをするのだと、想像した。

私には、戦争をする意味がわからない。戦争をした後に残るのは、人々の悲しみだけだ。人間は、喋ることが出来るのだから話し合いをすればいいのと思う。なぜ、戦争はなくなるのだろうか。

調べてみると、戦争や紛争が起きる原因は、異なる「民族」の争い、「宗教」の違い、「資源」をめぐる争い、「政治」の争い、「領土」をめぐる争いなどが組み合わさって起こっているということだった。そして、「戦争は、最大の人権侵害である。」と書かれた記事を見た。まさにその通りだと思った。戦争では、様々な権利を制圧されたり否定されたりする。基本的人権の一つである「生きる権利」さえも脅かされる。

一人ひとりが持っている「生きる」権利は、どんな理由があっても、誰にも奪えないものだと思う。一人ひとりがかけがえのない、大切な命を持っている。そんな命をいとも簡単に奪ってしまう戦争を私たちは、二度と起こしてはいけない。

第二次世界大戦が終戦して、78年経ち、日本で戦争を経験された方は、少なくなってきている。私の身内では、戦争を経験した人はいなくなってしまった。だからこそ、私たちは、自ら戦争を経験した人の話を聞いたり、資料を見たりして学び、次の世代へとそれを語りつないでいく必要がある。

世界から戦争や紛争が無くなり、世界中の人々が平和に、自由に、幸せに暮らせる未来を願って……。







## 認め合える社会へ

笠田中学校 2年 <sup>ほそ</sup> <sup>はら</sup> <sup>くるみ</sup>  
細 原 来 美

誹謗中傷という言葉を知っていますか。誹謗中傷とは、根拠のない、嘘やでたらめを言って他人の名誉を傷つけることです。誹謗中傷により亡くなってしまったり、いやな思いをしたりする方がたくさんいます。

私は、ニュースで誹謗中傷で亡くなった方を見てると、とても心が痛かったです。その人は私が前から知っているタレントさんでした。ジェンダーだからという理由で一部の人から誹謗中傷を受けていました。その人の元妻の方が「受け入れられなくていい、認めてあげるだけでいいんだよ。あなたはあなた。私は私。」と言っていました。これを聞いて、認めるというのはとても大事なことだということを知りました。今まで、受け入れるのが大事だと思っていました。でも、人はみんな好きなことや嫌いなことがばらばらだから、「あなたはそれが好きなんだね。でも私はこれが好き。」というふうに考えるのが大事だと気づかされました。誰かが好きなものを自分も好きになろうとしなくていい。自分が本当に好きなことを好きといえればいいんだと考えるようになりました。だからもし、今自分が他の人と違うことに悩んでいる人がいたら、他の人の意見に流されないで自分の好きなものを好きでいればいいんだよ、と伝えたいです。それぞれお互いに違うところを認め合うことができれば、差別や誹謗中傷はなくなると思います。

私の母は、マラソンをしています。何年前から、伴走も始めました。私も聴覚障がい者の人に何度か会ったことがあり、一緒に走っているところも見たことがあります。ですが最初の頃、私は少し抵抗がありました。怖いと思ってしまったのです。けれど母は、私に接するときと同じように笑顔で話していました。そんな母を見て、私は怖いと思ってしまったことをとても後悔しました。そして、私が驚いたのは、その人は一人で電車や新幹線に乗って大阪から東京まで行っているということです。もちろん乗り換えたりご飯も自分で買ったりするらしいです。これを聞いて本当に何も私達と変わらないのだなと思いました。まだよく分からないのに、見た目や想像だけで苦手な人にしてはいけないということがよく分かりました。

私は、母のように、障がいのある方のお手伝いとなるようなことを、進んでできるようにになりたいです。例えば、見て見ぬふりをせず、積極的に声をかけることや、公共交通機関で席を譲ることです。誰かがしているのを見ると、勇気がなかった人でも自分もやろうと考えると思うので、このようなことをできる人が増えればいいと思っています。

私は、お互いを認め合い、誰かが自分の好きなことなどを否定しないでいい世の中をつくりたいです。もし、何かを抱えて苦しんでいる人がいたら、その人の本音はその人にしか分からないので、無理に聞こうとせず、つらいときはただ支えてあげようと思います。

ひとりひとりの個性を尊重し、みんなが認め合える社会になることを心から願っています。



## 障害者を支えよう

笠田高等学校 3年 <sup>うえがいと</sup> <sup>あゆ</sup> <sup>み</sup>  
上垣内 歩 美

私たちが暮らしている中で障害者とすれ違ったことがたくさんあると思います。障害には、耳が聞こえない人や目が見えない人がいます。そして、外見では分かりづらい障害を持っている人もいます。その方たちが困っているのに助けてあげている人はあまり見たことがありません。こんなことがあって良いのだろうかとは私は思っています。私は一度目があまり見えない女性の方が駅で困っているのを助けたことがあります。そのとき私は声をかけるのに少しためらいました。どう声をかけたら良いのかとか声をかけてもし迷惑だったらどうしようなど相手がどう思うのか頭の中で考えていました。ですが、体の方が先に動いていて女性に声をかけていました。女性は次の駅に向かうのに二つの電車のどちらを使ったら良いのか迷っていたらしく、私が道案内をして教えてあげました。女性は電車に乗るとき「ありがとう」と言ってくれました。私はその時人を助けるというのはとても良いことだし、助けた人からの感謝の言葉がとても気持ち良かったことを今でも覚えています。

もう一つ私が体験したことは、小学校6年生の時のことです。私は正月くらいに少しずつ目が見えづらくなっていきました。そして一週間くらいで左目が完全に見えなくなった時があります。今は治療して見えるのですが治るのに約2年かかりました。目が見えなくなった時私は片目だけだったのにまっすぐ歩くことができないのと左側から来たものにすぐ反応できないことがありました。そのとき私は目の障害を持っている人はこんなにも大変なのだ気がつきました。私もクラスの子たちや先生、親、地域の方にもとても支えてもらいました。しかし、身近な人だと困っていたらすぐに助けてあげることができそうですが、知らない人で障害を持っている人に声をかけて手伝ってあげるとするのはとても勇気がいることです。しかし私たちの勇気で、障害者の方たちは少しの不安が安心に変わることがあると私が体験したことから分かりました。だからこれからも困っている人に声をかけたいと思います。





## 人権とは



あまり自分には関係ない？

よくわからないけど堅苦しい感じ？



むずかしい感じ？

大切なもの？

## すべての人が幸せに生きる権利です

「人権」と言うと何か難しいものと考えてしまいがちですが、ごく普通に相手の立場、気持ちを思いやる事が出来れば、守られるものなのです。

### もし自分が相手の立場だったら……どんな気持ちだろう？

と想像してみてください。

いつの間にか染み付いた思い込みや先入観を取り払って、相手の気持ちに思いやりの心を持ちましょう。

いじめ、体罰を受けた

暴行、虐待を受けた

差別を受けた

名誉毀損、プライバシー侵害を受けた

セクシュアル・ハラスメントを受けた

インターネット上でプライバシーを侵害された など

ひとりで悩まずご相談ください

かつらぎ町役場 住民福祉課

TEL.0736-22-0300

FAX.0736-22-6432

かつらぎ町教育委員会

TEL.0736-22-0303

FAX.0736-22-7102

人権に関する  
教材や講座は  
こちら→

